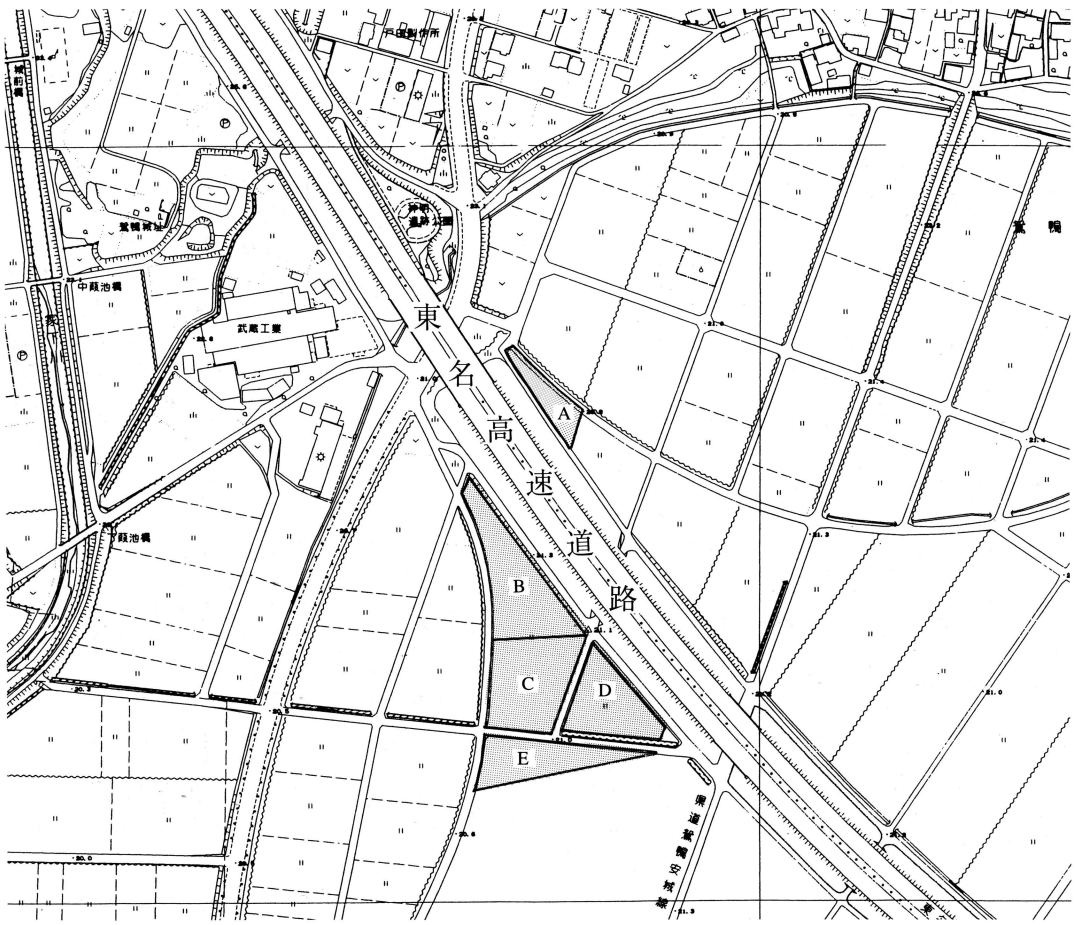
川原遺跡（かわはら）

調査の経過　川原遺跡は、豊田市鴛鴨町川原に所在し、矢作川中流域右岸に形成された標高２０ｍ前後の自然堤防上に立地している。本遺跡が位置する市域南部は、沖積地にも恵まれ、数多くの遺跡が展開する地域である。周辺には、碧海台地上に位置する弥生時代後期から古墳時代にかけての神明遺跡、矢迫遺跡、そして中世の鴛鴨城跡、また北東部には、沖積地上に広がる古墳時代から江戸時代にかけての郷上遺跡、さらに南西部には、古墳時代中期から戦国時代にかけての本川遺跡が存在している。

今回の調査は、第二東海自動車道の豊田ＪＣＴ建設予定地内の事前調査であり、日本道路公団から愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成９年４月より実施した。調査面積は、11,300㎡で、Ａ～Ｅの５つの調査区に分けて発掘調査を行った。

調査の概要　本遺跡は、愛知県の遺跡地図には縄文時代晩期の遺跡として登録されている。しかし、今回の発掘調査地点では、縄文時代晩期から中世にかけてほぼ途切れることなく営まれた複合遺跡であることが判明し、特に弥生時代中期から古墳時代にかけて多量の遺物や遺構が確認できた。ここでは大きく次の４期（Ⅰ期：縄文時代晩期～弥生時代中期、Ⅱ期：弥



第１図　調査区位置図（１：5000）

生時代後期～古墳時代、Ⅲ期：奈良・平安時代、Ⅳ期：中世）に分け、記述を進めていくことにする。　（春日井　毅）

Ⅰ期

Ⅰ期の遺構と遺物は、調査途中にあるため判然としない部分が多いが、縄文時代晩期と弥生時代中期にわけて考えることができる。

縄文時代晩期に関しては、遺物として晩期後半に属する条痕文を施す深鉢形土器片や石匙、石棒（石剣？）など若干の石器が散見できるのみであり、現状では明確な遺構の存在は確認できていない。

弥生時代中期は、概ね瓜郷式期から古井・獅子懸式期に該当すると考えられる。遺構としては、焼失家屋を含む竪穴住居跡群や方形周溝墓などを検出しており、西三河地方では数少ない当該期の良好な集落遺跡の展開が予測できる。出土遺物も土器を中心として豊富であり、とりわけ、石器の出土量の多さには注目できよう。出土した石器の種類は、打製石鏃、磨製石鏃、石錐、石包丁、磨製石斧、磨製石剣、石錘、砥石、粗製剥片石器など多種にわたり、なかでも多量に出土するフレークや極細粒砂岩ないしは安山岩を利用した粗製剥片石器の存在は集落内部での石器製作を推測させる。　（服部信博）

発掘調査風景

ＳＢ201出土弥生土器

II期　　Ⅱ期は、弥生時代後期から古墳時代初頭と古墳時代中期との大きく２つの時期に分けて考えることができ、主な遺構はＢ・Ｃ・Ｄ区を中心に展開している。

弥生時代後期から古墳時代初頭の主な遺構は、墳丘墓４基・主体部３１基・土坑７基・土器集積７ヶ所・方形周溝状遺構１基・墓域を区画すると考えられる大溝がある。

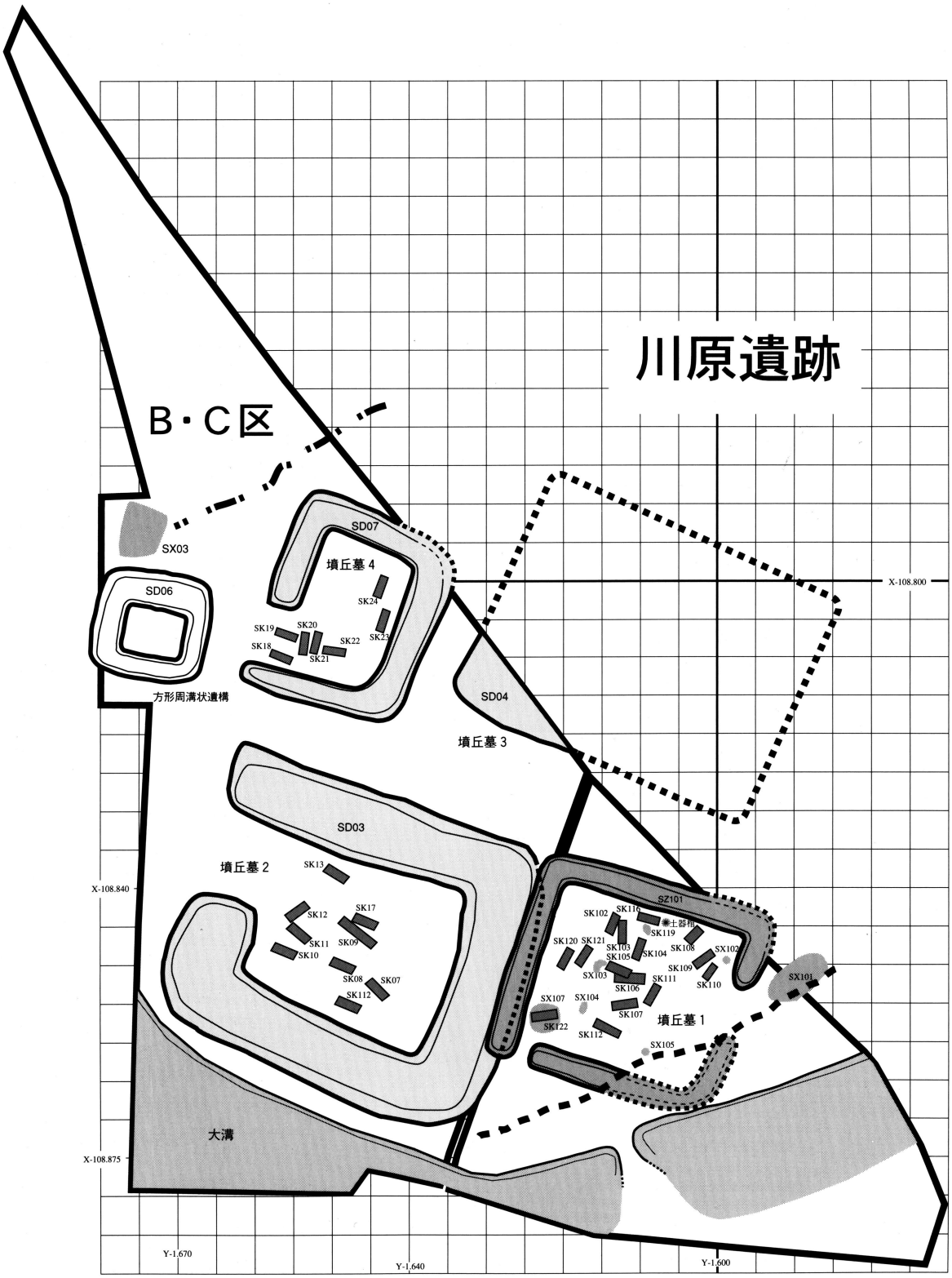
墳丘墓１は、23ｍ×27ｍの規模をもち、東周溝中央部と墳丘の南西部の２ヶ所に開口部をもつ。周溝の幅は約５ｍ、深さ約0.5ｍを測る。周溝で囲まれた墳丘部には15基の主体部が確認され、いくつかの墓壙からは、副葬品と思われる壺や高杯、管玉などが出土した。それらに伴う土器集積ＳＸ102～107も存在する。また土器棺が１基検出された。周溝からは祭祀に用いられたとみられる壺や脚付鉢、管玉などが出土した。この墳丘墓は出土した土器から廻間Ｉ式併行期に造営されたと思われる。

墳丘墓２は、26ｍ×35ｍの大型墳で、周溝幅は約10ｍと広く、深さ約0.7ｍを測る。墳丘の北西部に開口部をもつ。主体部は９基確認された。中でもＳＫ０９は墳丘の中央に位置する墓壙で、もっとも大きな規模（長さ５ｍ・幅1.5ｍ）であることから、この墳丘墓の中心主体と考えて間違いなかろう。この墓壙からは、副葬品と見られる赤彩された小型ワイングラス形高杯が出土した。しかし墳丘部には、墳丘墓１のように墓壙に伴った土器集積は見られなかった。また周溝からは、筒型石製品や管玉・勾玉などの石製品、祭祀的色彩の強い赤彩された高杯などの土器、銅鐸形土製品などが出土した。矢作川中流域では初見となる銅鐸形土製品は、鐸身の下半部と鰭及び鈕部分は欠損していたが、残存部分から１４㎝程度の高さと推定される。鐸身の外面には、やや粗雑ではあるが、細かな列点文や、鋸歯文が線刻されており、横帯を表現したと見られる。また舞には型持穴らしき穿孔が施されている。この墳丘墓は、出土した土器から山中式前期併行期に造営された可能性が高い。

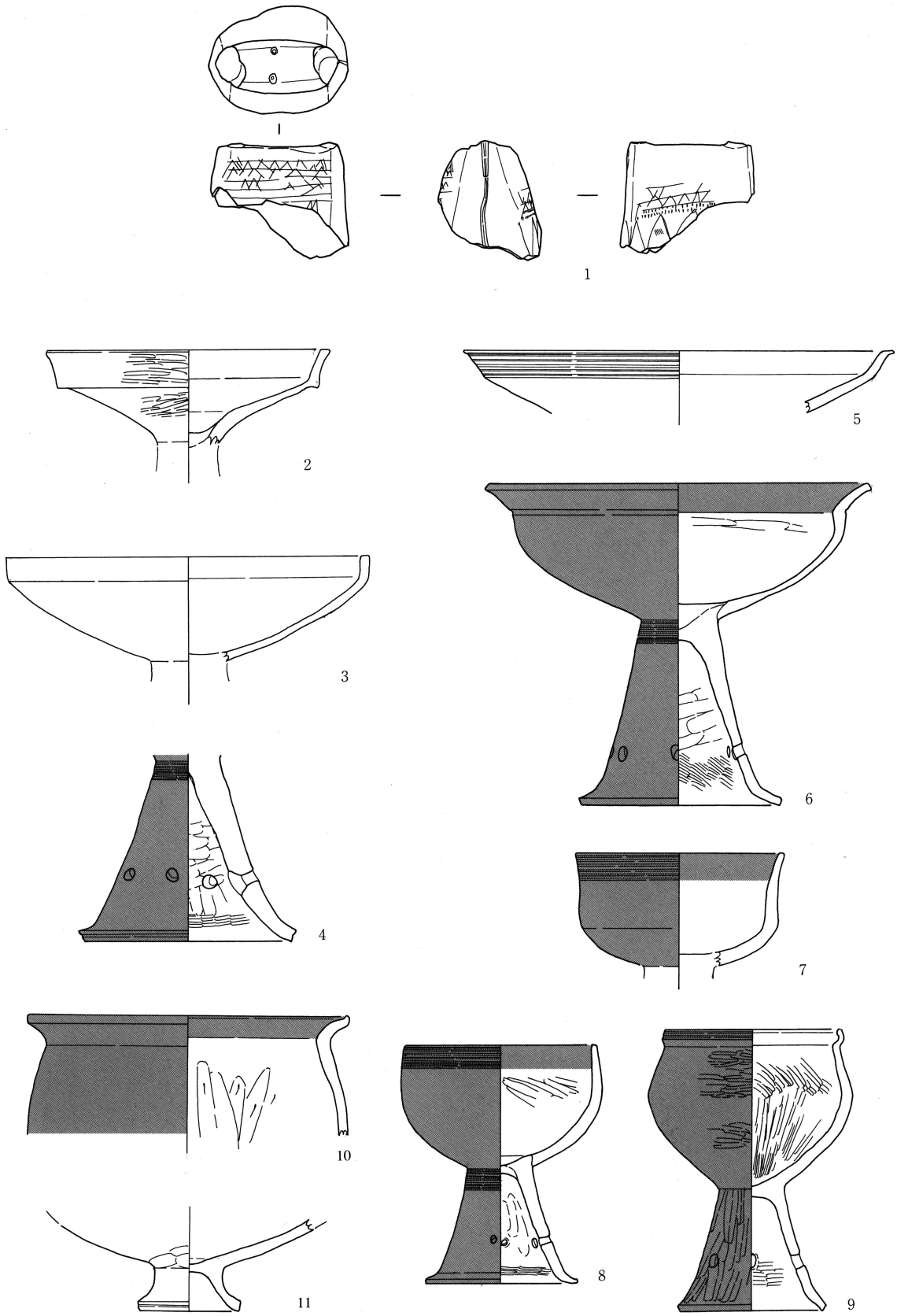
墳丘墓３は、周溝の南西隅を検出したのみで、墳丘部は調査区のさらに北側に展開する。ＳＤ04は、幅６ｍ以上・深さ0.3ｍ以上を測る比較的規模の大きな周溝と見られることから、この墳丘墓は墳丘墓２とほぼ同じ規模と考えられる。出土した土器から山中式中期併行期に属すると思われる。

墳丘墓４は、23ｍ×18ｍの規模をもち、墳丘の南西部に開口部をもつ。周溝の幅は約４ｍ前後、深さ約0.3ｍを測る。周溝で囲まれた墳丘部には６基の主体部が確認されたが、中央付近は攪乱により検出できなかった。また、これらに伴った土器集積や、墓壙からの顕著な副葬品は見られなかった。周溝からはパレス壺・高杯・台付甕などが出土した。出土した土器から山中式中期併行期に造営された墳丘墓と思われる。

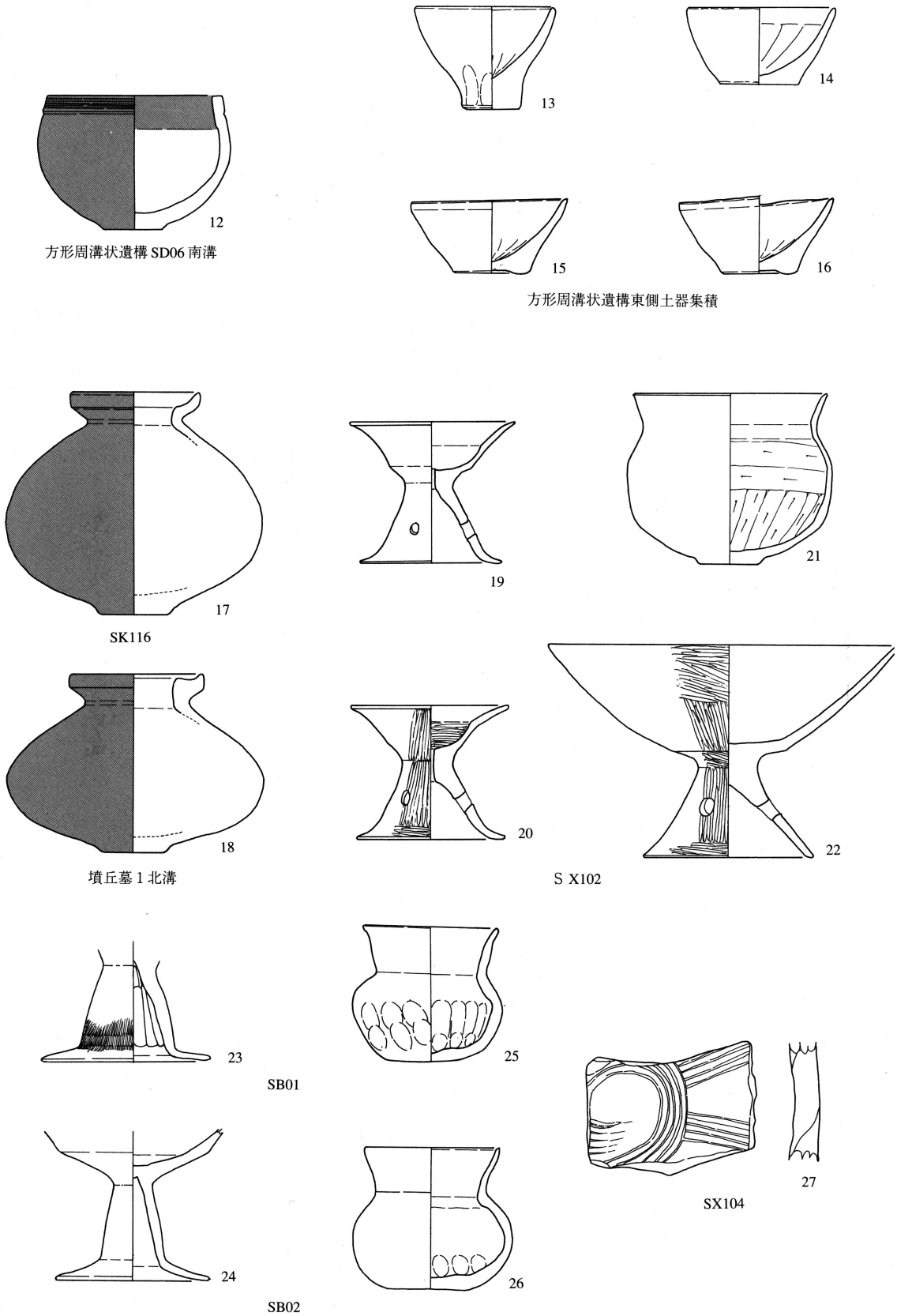
これらの墳丘墓から検出された主体部は、おおむね主軸を東西方向に置くものと、南北方向に置くものとが見られる。特に墳丘墓２の中心主体部の主軸が東西方向であることから、この方向がより意識されていたと考えられる。そして平面形態は、ほぼ長方形であり、断面はやや斜めに立ち上がる箱状の形態である。また墓壙はすべて組合式木棺墓で、埋土の痕跡から木棺は、小口を側板の外側にあて、側板はやや外方向に傾斜し、底板はその外部に置かれる形態であった。



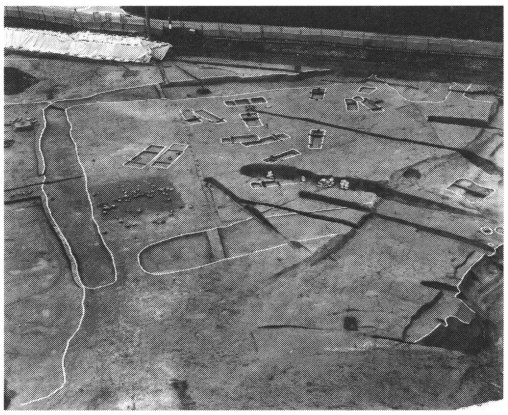
第２図　II期遺構図（１：800）

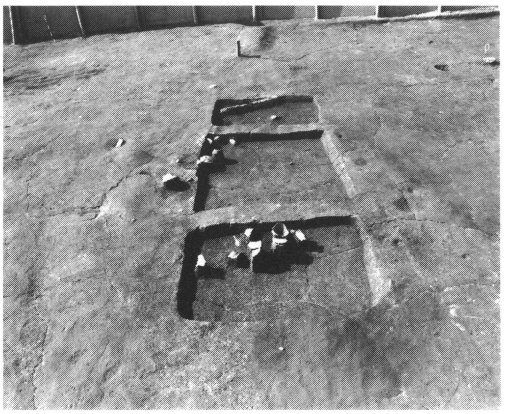


第３図　墳丘墓２出土遺物（１：４、１のみ１：３）

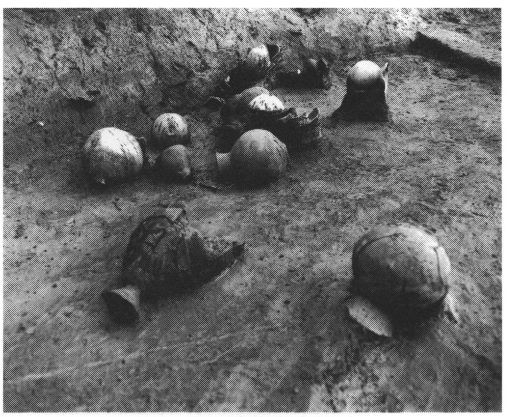


第４図　出土遺物（１：４、27のみ１：２）


墳丘墓１

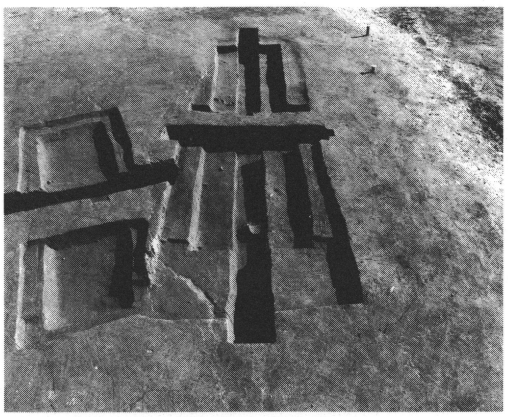

ＳＫ105

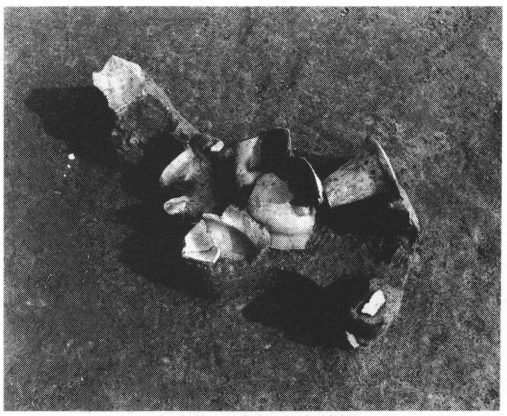
ＳＸ101遺物出土状況

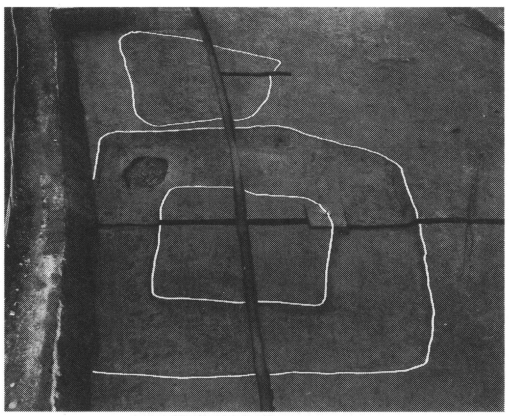

ＳＸ101遺物出土状況

ＳＸ102遺物出土状況

墳丘墓２


ＳＫ09・ＳＫ17


墳丘墓２遺物出土状況


方形周溝状遺構・ＳＸ03

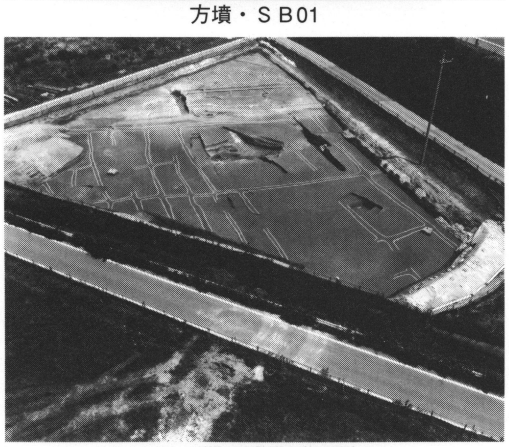
ＳＸ03遺物出土状況

小型鉢出土状況

墳丘墓４

方墳・ＳＢ01

ＳＢ01遺物出土状況


Ⅲ・Ⅳ期の遺構（Ｄ区）

ＳＫ02

方形周溝状遺構は、８ｍ×９ｍの方形壇の周囲を幅４ｍ前後の溝ＳＤ０６が取り囲むものである。方形周溝状の形態は検出された墳丘墓と同様であるが、その規模は著しく小さい。中央の方形壇は、壇上部が平坦であり、そこからの遺物の出土は見られず、明確な遺構も検出されなかった。これらの点は４基の墳丘墓に見られた特徴とは異なることから、この墓域に造営された墳丘墓とは考えにくい。むしろ周辺の遺構の在り方をみると、他の機能が考えられる。その手がかりとして、この遺構の北側に位置する、７ｍ×５ｍの不整形な方形プランをもった浅い土坑状の土器集積遺構ＳＸ０３からは、ミニチュア土器・台付小型丸底壺・ワイングラス形高杯など祭祀に用いられたとみられる土器が大量に出土した。そして東側には、入れ子状になった小型鉢などの土器集積が見られた。そこで、祭祀的な遺物を多量に出土したこれらの遺構に対して、遺物を出土しなかった方形壇は、周溝により区画された「祭祀のための空間」と考えられる。周溝ＳＤ０６から据え置かれた状態で出土した赤彩された鉢の存在からもこのことが裏付けられよう。また周辺の遺構は、方形壇での祭祀に用いられた土器（道具）を片づけた痕跡と思われる。したがって方形周溝状遺構は墳丘墓に伴う祭祀施設と見ることができよう。出土した遺物から山中式併行期から廻間式併行期にかけて、継続して造営されていた墳丘墓を対象にした祖霊崇拝的な大規模な墓前祭祀が、この場所で執り行われていたことが想定される。

土器集積は、主に墳丘墓１で確認され、その性格は２つに大別できる。１つは主体部付近に配置された土器群ＳＸ102～107であり、いま１つは墳丘墓１の開口部の外側に位置するＳＸ101の存在である。前者は埋葬用に供えられた供献土器の集積の場と考えられ、後者は墳丘墓１で繰り返し執り行われた墓前祭に伴う土器を処置した場と考えられる。

墳丘墓が展開する微高地の縁辺部には幅およそ20ｍ～25ｍの大溝が巡る。この大溝は、部分的に中世の大溝に切られているが、およそ1.5ｍくらいの深さでほぼ垂直に立ち上がる傾斜面をもつ。この溝は墓域を区画するための区画溝と考えられるが、規模がかなり大きいのでさらに別な機能を有していた可能性も推定される。

古墳時代中期の主な遺構は、方墳１基・竪穴住居２棟・掘立柱建物１棟・大溝である。

方墳は、11ｍ×12ｍの規模をもち、幅約３ｍ・深さ約0.３ｍの周溝が墳丘部を囲んでいる。墳丘は削平を受けており、主体部は検出されなかった。周溝から出土した土器より、松河戸式前期併行期に造営されたと見られる。

竪穴住居は、２棟検出された。ＳＢ01・02は、規模はほぼ同じで１辺5.6ｍほどを測り、隅円方形のプランを呈する。これらの住居の床面には、焼土や炭化物が一面に広がっており、ＳＢ０２からは炉石も確認された。出土遺物には小型高杯や小型丸底壺など祭祀に用いられたと考えられる土器が含まれ、住居の壁面に沿って廃棄されたような形で出土した。

掘立柱建物ＳＢ03は、３間×１間の規模をもつ。

竪穴住居はＳＢ01・02の２棟以外は検出されず特異な存在として位置づけられる。ここでは、掘立柱建物と併せて方墳にかかわる施設として方墳を中心に配置されていると見ることができよう。そこで大胆に推測するならば、掘立柱建物は、死者を仮に納めて祭る殯

の場であり、方墳は死者を葬る場、方墳を中心にほぼ対称的に位置する２棟の竪穴住居は、墓を管理する仮小屋的な場と考えられよう。

ＳＤ08は、Ⅱ期の大溝を再掘削した溝で、幅約２ｍ・深さ約1.2ｍを測る。埋土中からは建築部材と思われる木製品が出土している。　（秋田幸純・飴谷　一）

Ⅲ期・Ⅳ期　Ⅲ期（奈良・平安）の遺構は、Ｄ区で竪穴住居を重複する形で１２棟検出した。住居の規模は、一辺３～５ｍ程度の規模である。いずれの住居も大きく削平されているため、深さは数cm程度しかない。検出された竪穴住居は、方向等から２～３グループに分類できる。遺物の量は少ないが、各住居跡より奈良時代の須恵器や灰釉陶器が若干出土している。

Ⅳ期（中世）の遺構としては、まずＤ区からＥ区にかけて延びる幅約３５ｍの大溝が挙げられる。この大溝が埋まった後、水田として利用され、調査では上下２面の水田面を確認することができた。上層水田は戦国時代末、下層水田は室町時代後半に比定することができる。いずれの水田も概ね谷状地形の傾斜を利用し、幅は７ｍ前後の区画を有する。また、いずれの水田面からも、当該期の土器をはじめ多数の遺物が出土しており、銅銭など金属製品も見られた。

また、下層水田に伴う土抗（ＳＫ０２）からは、馬の頭蓋骨が出土した。雨対策のための犠牲馬を埋納したものと思われる。　（春日井　毅）

まとめ　今回の川原遺跡の発掘調査では、縄文晩期から戦国時代にいたる各時期の遺構・遺物を検出することができ、多大な成果を納めることができた。ここでは特にⅡ期をとりあげ、まとめとしたい。以下の３点をあげることができる。

まず、第１に３５ｍを測る墳丘墓２の存在である。巨大な墳丘墓としては佐賀県吉野ヶ里遺跡、愛知県朝日遺跡などの存在が知られているが、いずれも中期前半代の築造であり、弥生時代後期の社会においては、全国的に最大級のものと考えられる。

第２に全国的にも極めて珍しい巨大な墳丘墓のみで構成された「墓域」の存在を確認したことである。これらの墳丘墓を造営した集団の居住域としては、台地上の神明遺跡が考えられるが、現在までの調査成果から弥生時代の竪穴住居は数軒にとどまり、墳丘墓群の規模から見て、神明遺跡をその居住域と考えるには無理がある。未だ発見されていない拠点的大集落が周辺に展開する可能性を考えねばならないであろう。さらには、これらの墳丘墓群を築造しえた矢作川中流域に影響を持つ特定の権力者の存在を想定する必要もあると思われる。

最後に墳丘墓にかかわる祭祀の痕跡が各所で確認されている点を強調しておきたい。具体的には墓域全体の祭りを象徴する祭祀場所としての方形周溝状遺構や、墳丘墓１の墓前祭に関連したと考えられる土器処置場であるＳＸ101。そして木棺墓への供献土器集積（ＳＸ102～107）などである。当時の祭祀の形態を考える上で貴重な資料を提供できたと思われる。　（服部信博）